自分自身を成長させ、社会に貢献し、人の役に立つことが大切だと強く思う。

インターンシップで終わることなく、将来のビジネスを見通して、人はなぜ働くのかと自問し続けるきっかけを与えてくれたT社長に感謝したい。　【金信愛】

人生の可能性広げてくれた日本人女子学生

3年前に九州の日本語言語学校を卒業、関学に入学した。最初の大学生活がスタートしてすぐ日本人の女子学生のAさんと出会った。そして、二人の恋が始まり、人生は大きく変わった。

入学直後、たまたま興味を持ち、スピードスケート部に入った。毎日、深夜までの練習が終わった後、宿題もあった。留学生として、辛い生活が続いた。ストレスがたまって部活をやめようと思った時もあった。そんな時Aさんに悩みを言うと、色々と励ましてくれた。

Aさんは様々な日本の文化を教えてくれたり、一緒に日本料理を作ったりした。週末には、Aさんは遠くの魚住から神戸に住む自分の家に来て、おいしいご飯を作ってくれた。そんなに優しくしてくれるAさんを失望させないように、毎日必死になって練習をした。

その結果、全国の大学生インターカレッジ大会に出場できた。1000㍍で全国20位の好成績を挙げることができ、Aさんは大変喜んでくれた。もし、Aさんと知り合わなければ、そんなに頑張れなかったかもしれない。

Aさんと付き合ったお陰で、日本の生活が大好きになった。将来目指す道が違い、Aさんと別れることになってしまったが、本当に感謝している。

出会いは三つある。人との出会い、言葉との出会い、チャンスとの出会いだ。この三つの出会いで、人生は変わっていく。愛する人に出会ったら、それだけで幸運だ。その出会いは運命だったかもしれない。

【畢博文】

将来見据え「留学を」背中押してくれた祖父

韓国・釜山の高校2年生の時、進路について悩んだ。祖父がその時、言ってくれた言葉が日本への留学のきっかけになり、今も心に深く残っている。

祖父は30代のとき、釜山の放送局で記者を3年間経験し、その後は貿易事業を通じて日本やタイなどのアジアの国々と関わった。日本の企業と貿易の仕事をした祖父は日本の文化や風習などをよく教えてくれた。その影響で国際的な企業に就職したくなったが、勉強に興味はわかなかった。その時、祖父は日本への大学進学を真剣に勧めてくれた。

そんな自分を見て祖父は「日本は大企業と中小企業のバランスがよく、経済力は韓国より高い。日本の企業に入って、ビジネスシステムを学び、経験したらよい。そうすれば国際的な企業に入る重要な機会も得られるだろう」と言った。その言葉が大きな力となり、高校から日本語と英語の勉強に打ち込んだ。そして、関西学院大学に入学できた。大学でも祖父が経験した言葉が役に立ち、助けられることも多い。

祖父は家族を超えて、一人の人間として尊敬できる人物である。これからも祖父のような努力をしなければならないと思う。

【リ・テギョン】

被災時 新聞の役割は

――デジタル時代 どう対応

毎日新聞大阪本社を取材

熊本地震直後の4月末、関西学院大学総合政策学部の日本語Vクラスは大阪市北区の毎日新聞大阪本社を取材した。深刻な地震が起きた時、新聞がどんな紙面作りをするのかを知るのが目的だった。被災地だけでなく、被災情報を待つ読者全体からの期待に応えるため、記者らが奮闘する姿を取材することができた。また世界でも稀有な点字新聞の存在も知った。デジタル時代でも新聞の果たす役割の重要さが一段と高まっていると考えた。

【周沛琦、ナム・ユジョン、リ・テギョン、劉双達】

浦窪部長（左）から紙面制作の説明を聞く留学生

被災者の心に灯

困難なときこそ、役に立つ正しい情報が必要である。新聞社は大きな公共性を持つメディアとして、災害時の使命と役割、福祉活動を通して、社会的責任を果たしている。毎日新聞大阪本社に取材に行ったとき、編集制作センターの浦窪学部長から災害時の新聞が果たす使命について、話を聞いた。新聞記者という職業の難しさを初めて知り、そして、新聞が「被災者の灯」の役割を果たしていることを考えた。

浦窪部長は災害が発生した後、被災地の惨状を多くの人に伝えることが新聞の最も重要な使命であると言った。被災地だけではなく、全国各地から世界に向けて情報を伝えることによって、救助や復興などに直接つながるからである。記者達は被災地に行き、目の前で、傷ついた人達、家族を失った人達の写真を撮影、話を聞く。つらいことが多いが、それは新聞記者という職業の使命である。

4月14日、熊本県に地震が発生して以来、地震に関する情報や被災者の安否情報、生活関連情報などを伝え、この難関を乗り越えようと新聞記者たちは努力をしていた。

4月30日の取材当日の毎日新聞夕刊1面トップは「GW　被災地の力に」という記事であった。ゴールデンウィークが始まり、高速道路や鉄道などが復旧して、全国各地からのボランティアが集まり、震災ごみの片付けなどに汗を流したという記事内容であった。職業、年齢、国家など様々違うボランティアの姿を、この記事は被災地だけではなく、全国各地や世界に伝えている。

熊本の被災地に関心を持っている人達は新聞を通して、力をあわせることができる。そして、被災地の人達は新聞で、多くの人の努力を知り、安心することもできる。これは最も意義があることではないだろうか。

【劉双達】

刷り上がった夕刊の説明を聞く留学生

事実に迫る写真の力

毎日新聞社の取材を通して写真の役割が記事と同じように重要であることが分かった。

G1センター部長の浦窪学さんが見せてくれた東日本大地震と熊本地震での記事と写真が大変印象的だった。大地震の切迫した状況を写真一枚で読者に知らせることができ、記事だけでは読者に伝えることは限界があると思う。それだけ写真の役割が新聞で大きな力を発揮すると感じた。

現在、新聞の写真は読者の興味をひいて、記事の理解を助ける役割もしている。事件の状況を写真とタイトルだけを見て判断する読者も多い。毎日新聞社の取材で、記憶に残る記事があった。当日の夕刊紙面で、熊本地震の後、全国から来てボランティア活動をする人を写真で紹介していた。それは市民を安心させる役割も果たしていた。

韓国は自然災害が起こると、刺激的な記事とともに、市民が苦しんでいる姿や被害状況を写真で撮って、多くの人の関心を集めることがほとんどである。韓国と日本の記事の扱う中身が異なることを強く感じた。

写真記者は事件事故の写真を撮るため、時には危険を冒して取材する。しかし、SNSで市民が記者より早く写真を発信し、写真記事の必要性と新聞の写真の役割を知らない人が増えている。読者は写真記者が一瞬の写真を伝えるために奮闘しているのを知っておく必要がある。改めて、記事に深みを与える写真の重要さを強調したいと思う。

【リ・テギョン】

信頼に応え正確さ追求

毎日新聞は今のデジタル時代にどう競争して、対応しているか、そんな疑問を持って、毎日新聞大阪本社を見学した。

最初に見学したのは、14階の編集局だった。GW期間中で、比較的に大きなニュースが少なく、ちょうど夕刊の最終版の編集が始まる時間だったが、想像したほど記者は忙しくしていなかった。

このとき、赤いペンで何度も原稿を修正し、推敲していた記者の姿が目に入った。紙面の文字や見出しなどの最終チェックをしていた校閲記者だった。情報が乱れているデジタル時代に正確な「事実」を読者に伝える新聞を作るため、記者たちの努力が紙面に込められていたのを実感した。

毎日新聞ビルの地下5階には印刷工場がある。そこで一番印象に残ったのは「信頼を印刷する」と書かれていた看板だった。薄暗くて、輪転機の騒音が激しく、かならずしも良い環境ではなかったが、その場で印刷作業員の「購読者の信頼を印刷している」という意識が伝わり、本当に感動した。デジタル時代を勝ち抜くためにはそんな「信頼」が大切と思った。

浦窪学・G1部長は東大の入学式で学長が新入生たちに「ネットニュースを読むな、新聞を読め」を話したことを教えてくれた。新聞を読めば、頭に残るし、考える力も身に付けることができる。読んで、考えて、将来のことを判断できる力を養うのが新聞の力だ。読むことによって、自分にとって、初めてのことや興味がないこと、他人の意見などを知ることができる。自分の視野も広がる。他人の意見を受け入れる能力も身に付く。デジタル時代にあっても、新聞が必要な理由は多くあると痛感した。

【周沛琦】

編集局で紙面づくりを取材する留学生（左）

弱者に希望 点字新聞

毎日新聞の取材で初めて点字新聞の存在を知った。直接に点字新聞を手に取ると、紙面の上に点が浮かび上がり、それが特定の文字を示していた。全く初めての感触で新鮮に感じた。

点字新聞を最初は全然読めなかったが、視覚障害者が世間の出来事を知る唯一の手段になっていることを知った。

毎日新聞は1922年初めて、週刊点字新聞「点字毎日」を発刊させた。視覚障害者の福祉、教育、文化の向上に寄与するとともに、社会とをつなぐ懸け橋としての役割も担い続け、今も多くの読者に親しまれている。90年以上の長期にわたって点字新聞を発行し続けている新聞社は、毎日新聞社が国内唯一で、世界的にも例がないという。

ところが、自分の母国である韓国では、1965年に盲人のための点字新聞である「点字韓国」が創刊されたことがあるが、現在は廃刊になり、視覚障害者のための点字新聞は出てないそうだ。

点字新聞は利益が出ないので、長く続けることは難しいのだろう。それにもかかわらず、ずっと発刊し続けている毎日新聞は弱い立場にいる人たちの側にあって、生活に希望を与えているように思える。

韓国でも弱い立場の人に寄り添う点字新聞があって欲しい。

【ナム・ユジョン】